

【西川圭吾先生抄録】

演題

「顔面補綴装置（エピテーゼ）の実際」

—21年間の臨床体験—

外傷・腫瘍および先天的な要因で顔面に実質欠損がある場合には形成外科医による組織再建が行われることが多いが、複雑な顔面性状を元通りに復元することは難しい。このように患部の状態や時間的制約、そして患者が非観血処置を望む場合など、外科的処置が難しい場合には、患者の顔貌に調和させて製作される顔面補綴装置（エピテーゼ）が適応される。

エピテーゼはシリコン樹脂で製作されるが、エピテーゼ治療が国外で始まった経緯もあり、以前は輸入品で薬事認証が得られておらず問題になることもしばしばであった。このため日本顎顔面補綴学会は「薬事承認を目指したエピテーゼ用材料の開発プロジェクト」を発足させ、現在国産材料が発売されている。このように製作技術にとどまらない、患者への安心安全な補綴装置の提供のための取り組みが行われている。

また、全国各地の大学病院においてもエピテーゼ、術前シミュレーション模型、その他医科由来の補綴装置など医科との連携が行われるようになり、日本歯科技工学会においても多くの発表が行われている。

日本口腔顎顔面技工学会においては、活動当初より医科との連携項目についての発表を行う中で歯科技工士の可能性と展望を模索し続け、毎年熱い論議が繰り広げられており、諸先輩や会員、患者から得たアドバイスも多い。

演者は、2003年より21年間、北海道大学病院生体技工部にて歯科技工士としてエピテーゼの製作に携わってきた。当初より3Dプリンターを応用し、アナログとデジタルの融合を実践してきた。また、アメリカの現場を視察・学会発表する機会にも恵まれ、スキルアップを図る事ができた。

今回は、自身が歩んできたラインを時系列で振り返り、北海道大学病院でのエピテーゼ製作の経緯と症例、エピテーゼの歴史、使用材料、製作方法、国内外のエピテーゼ事情等について今後の展望を含め解説する。